



写真-1 円山川と伊佐橋（令和3年8月撮影）

■ 羽柴秀長の軍勢を舟で円山川の対岸まで渡した太郎左衛門の話

写真-1は、一級河川・円山川に架かる（主）2号宮津養父線の伊佐橋（いざばし）を撮ったもので、中央の山は進美寺山（しんめいじさん：標高360.5m）です。この橋は、昭和52（1977）年に架けられた3径間連続鋼合成鈹桁（2連）橋で、橋長237m、幅員12m（車道7m、両側歩道5m）です。この橋から出石の有子山城までは約10kmです。

今回は、天正8（1580）年羽柴秀長が兄・羽柴秀吉の命を受けて行った第二次但馬征伐において、総勢6千4百余の秀長軍を舟で円山川の対岸まで渡した藪崎村（現・養父市藪崎）の太郎左衛門にまつわる話です。

天正8（1580）年5月16日、円山川を渡って出石の有子山城を攻め落とし、その後但馬の諸将が籠る水生城（みすのおじょう：現・豊岡市日高町上石）を攻略、但馬平定を終えた秀長は、同年6月頃織田信長によって有子山城主に任命され、但馬国で10万5千石の領地を与えられました。この時、秀長は但馬平定に貢献のあった領内の農民に対して褒美を与えています。

5月15日岩中村（現・豊岡市日高町・江原駅の南）の4人、6月25日浅間村と網場（なんば）村の各1人、合計6人に鮎を捕る税金を免除する鮎漁免状を、また、8月13日には藪崎村の太郎左衛門に、税金の一部を免除する免状を与えています。

藪崎村では、秀長の軍勢が円山川を渡河するのを助けたことに対する褒美だと伝えられています。免状には「諸公事※¹（しよくじ）免許せしむのところ、違儀あるべからず候也。小一郎長秀（秀長は当時、長秀と名乗っていた） 八月十三日 養父 太郎左衛門」とあり、諸公事免除は鮎漁免状に比べて格段に高い恩賞だそうです。



写真-2 願入寺横にある「諸公事免除」の文言が刻まれた顕彰碑

諸公事免除の内容について『但馬の中世史』では概ね以下のように説明されています。

「数崎村が諸公事免除の特権を与えられたことによる最も大きな恩恵は、夫米^{※2}（ふまい）の免除である。夫米とは、労役の代わりに納める米のことで、～（中略）～ 出石藩では万治3（1660）年頃から始まったようである。額は本途物成（ほんとものなり：本年貢）の7.5%であった。太郎左衛門の持ち高は53石余であって、これにかかる夫米額は3石3合、これが江戸時代を通じて数崎村では免除されていたのである。」

太郎左衛門のおかげで夫米が免除されていた養父市数崎区では、太郎左衛門を顕彰し羽柴秀長の恩賞に感謝する太閤祭を、毎年9月、願入寺横にある太郎左衛門の供養塔の前で行っています。江戸時代には太閤祭り・御免祭りといって8月13日に行っていた伝統行事です。



写真-3 願入寺



写真-4 願入寺横にある太郎左衛門の供養塔

※1 公事：中世においては、年貢・所当・官物と呼ばれた租税を除いた全ての雑税を指して「公事」と呼ばれた。由来は平安時代中期に行われた庸や調に替わる朝廷からの臨時の賦課であったが、荘園公領制の確立とともに荘園・公領・座などでも徴収されるようになり、太閤検地による新たな租税体系確立まで続いた。

※2 夫米：労役の代わりに納める米のこと。年貢には本年貢である本途物成と、その付加税である夫米・口米・諸運上の小物成などがある。

■ 羽柴秀吉、弟の羽柴秀長に但馬攻略を命ず

天正8（1580）年1月、羽柴秀吉は兵糧攻めにより三木城を落とすと、3月下旬に英賀（あが）城を攻めます。三木城に密かに兵糧を運んで別所氏を助けていた英賀城主・三木通秋は、秀吉軍の攻撃を受けて4月26日海路九州に逃げます。

また、毛利氏とよしみを通じていた宍粟郡の長水山（ちょうすいさん）城主・宇野政頼も抵抗を続けていましたが、秀吉は同年4月24日英賀城攻めの兵を割いて長水山城を攻め、5月10日に落城させます。

これに先立ち、英賀城および長水山城を残し播磨をほぼ平定した秀吉は、因幡進攻にあたって背後を突かれないために、弟の羽柴秀長に但馬攻略を命じます。この戦いは、天正5（1577）年11月の秀吉による第一次但馬征伐に続く第二次但馬征伐と呼ばれています。

秀長は、宮部継潤（みやべけいじゅん）らとともに4月から5月上旬にかけて竹田城を手始めに朝来・養父両郡の諸城を攻め落としてのち、出石・気多（けた）の反信長勢力を攻略し、但馬を平定します。

では、秀吉軍の但馬進攻の中で、太郎左衛門らが円山川を渡河するのを助けた地点はどこで、どのような方法で6千4百余の軍勢を渡河させたのでしょうか。



写真-5 豊臣秀長像
（大和郡山市の春岳院所蔵）
（Wikipedia から引用）

■ 秀長軍が円山川を渡った地点はどこか？

『兵庫県史』によると、秀長軍の但馬進攻は概ね以下のような流れになっています。

毛利の吉川(きっかわ)元春軍が但馬に進出したことで、但馬の毛利党はその勢力を盛り返していましたが、天正7(1579)年9月に伯耆の南条元統が宇喜多直家と示し合わせて毛利氏から離反したため、元春は背後を脅(おびや)かされることになります。このため、元春は但馬から撤退し、但馬の毛利党は孤立無援の状態に置かれることに。

そこに秀長率いる軍勢が進攻したので、但馬の守護・山名氏の居城であった出石の有子山城は5月16日にあっさり落城、城主・山名氏政は因幡に逃れ、父の佑豊は落城から5日後に病没します。

毛利党として活躍していた垣屋豊統(とよつぐ)は、一族とともに水生(みすのお)城に立て籠って最後の抵抗を試みますが、秀長軍の攻囲に耐え切れず豊統は城と運命をともにします。



写真-6 長砂橋から有子山城を望む

上記のように『兵庫県史』では秀長軍の円山川渡河の話は出てきませんが、『郷土の城ものがたり～但馬編』に出ているので、かなり端折りますが紹介します。(ここでは秀吉が但馬に進攻したとあるので、そこは秀長に置き換えている。なので物語の信憑性に不安あり！)

天正5(1577)年以来、但馬勢の総指揮をとっていたのは、美含郡(みくみぐん)轟(とどろき)城主の垣屋豊統でした。羽柴勢が気多郡に攻め込んでくるらしいと聞き、轟城を出て西村丹後守の居城水生城に立て籠ります。水生城には、垣屋豊統を中心に、林甫城(りんぼうじょう)主・長越前守、上野(上郷=かみのごう)城主・赤木丹後守、伊福(いふく)城主・下津屋伯耆守、国分寺城主・大坪又四郎、宮井城主・篠部伊賀守らの面々が集まり作戦会議が開かれます。

垣屋豊統は、「山名氏は代々当国の守護領主であり、われら先祖も数代に渡って扶持(ふち)を頂いてきた。そのご恩に報いるため一戦を交えるべきで、はかりごとをもって戦えば必ず勝機はある。秀長軍は宿南から最短で気多に侵入するため、養父郡宿南村と浅倉との間の岩歩危(いわほき: 写真-7)を通るであろう。ここは岩山で、下は円山川の深い淵になっていて、道は細く一人ずつより通れない所、山上から数百の大石を落とし、ひるむところを前後から討って出て、あわよくば秀長を敗退させ、もしかなわぬ時は討ち死にしていでも、山名氏のご恩に報いたい。」と話し、一同意を決します。



図-1 伊佐橋周辺の地図

ところが、ここに大きな誤算が生じます。篠部伊賀守は、長越前守、西村丹後守に対して、前から恨みがあったので、これは恨みを晴らすよい機会だと思い、家来の藤井伊助を秀長のもとに走らせ、この計略を秀長に密告します。〔『ひょうご水百景』No.187 参照〕

養父郡上小田村（現・養父市八鹿町）の豪農・斎藤谷左衛門の家で休んでいた秀長は、伊助の話を聞いてしばらく考えていましたが、扇でパンと膝を打ち、「城崎に通する迂回路ありや」と問うと、伊助は、「進美寺山の麓の南に浅間村があり、浅間峠を越え出石郡福住村に至ると、山名の本城・有子山城は目と鼻の先であります。」と答えました。現在の（主）宮津養父線のルートです。



写真-7 国道312号から岩歩危および浅倉トンネルを撮影

浅間城主・佐々木近江守義高は、秀長の大军を見て抵抗をあきらめ、自ら案内人となり、秀長勢を出石へ導きます。あっさり和有子山城を落とした秀長は、垣屋豊統はじめ但馬の武将たちが籠る水生城に向けて軍を進めます。彼は軍を二手に分け、一隊は浅野弥兵衛・仙石権兵衛を大将に、狭間坂（出石郡・気多郡の境＝出石町片間）を経て円山川を渡り城の大手から、もう一隊の宮部継潤は、これも円山川を渡って豊岡方面から城の搦め手（裏門）に向かい挟み撃ちにしました。

計略どおりに行かなかった水生城に籠る武将たちは、もはやどうすることもできず、籠城の将兵はいさぎよく意を決し秀長軍めがけて討って出ました。合戦は数時間にも及びましたが、とうとう水生城も落城してしまいました。

■ どのような方法で円山川を渡したのか？

上記物語によると、秀長軍が円山川を渡った地点は、（主）宮津養父線の伊佐橋付近と考えられます。では、6千4百余の軍勢をどのようにして渡したのでしょうか。現状、伊佐橋付近の水面幅は約160mです。渡し船でチンタラチンタラ渡していたら日が暮れます。それに、上記の物語のように急遽進攻ルートを変えて渡河しようとしても必要な舟がすぐには調達できません。

『養父町史』では、第一次但馬征伐のとき、秀吉は秀長に対し、「円山川を渡って布陣してはならない。すでに渡ってしまっている者も引き返させ、円山川西岸の朝来・養父両郡を固めよ」との命令を出しています。つまり、円山川渡河はそれだけ慎重を期す必要があるということから、秀長は第二次但馬征伐に際し、地元の農民を使って密かに何らかの手を打っていたと思われます。

さて、こういった手を打っていたのでしょうか。ヒントは、天正6（1578）年春、羽柴秀吉の軍勢が三木城攻めに向かう途中、加古川において地元の船頭たちが資材をかき集めて造った筏で秀吉軍を渡したことです（『ひょうご水百景』No.131 参照）。おそらく、秀長も秀吉からこの話を聞いていたはず。秀長から円山川渡河の段取りを依頼された太郎左衛門が、舟を並べて舟橋をつくるため予め村人の協力を得て舟や資材を調達していたものと思われます。なので、夫米免除は数崎村全体に及んだのではないのでしょうか。

■ 秀長軍が進軍した浅間峠越えのルートの今

昭和34（1959）年に架けられた旧伊佐橋は、2連トラス+RC桁でしたが、同年9月の伊勢湾台風をはじめ台風の度に橋脚が折れたり沈下したりして交通が途絶、その都度補修してきました。

しかし、大型重車両通過による損傷もひどく、幅員も狭いため、架け替え工事が進められ、現在の橋が昭和52（1977）年4月に完成しています。

また、七曲りと急勾配の交通の難所だった浅間峠は、昭和7（1932）年4月トンネル工事に着手、日中戦争により工事は中断しますが、昭和34（1959）年に再開（すいぶん間が空いている）し、昭和38（1963）年4月22日、浅間隧道が開通しました。

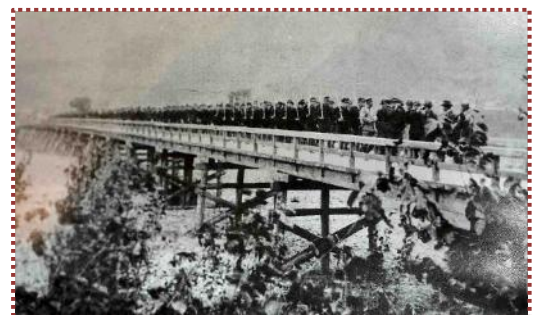


写真-8 行軍する蚕校生、伊佐橋を渡る（大正15年）
〔写真集 八鹿町の移り変わり〕から引用・加工



写真-9 被災前の旧伊佐橋

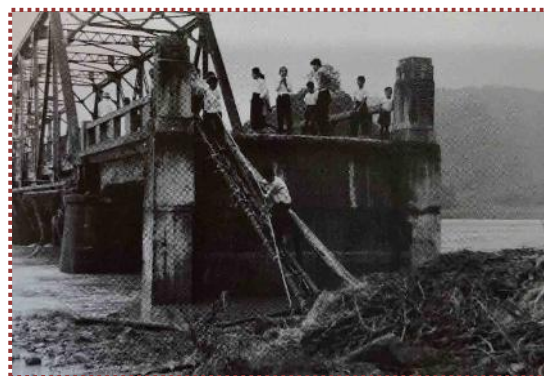


写真-10 伊勢湾台風により被災した旧伊佐橋
(『写真集 八鹿町の移り変わり』から引用・加工)

■ モノローグ

秀長軍は、出石の有子山城をあっさり落とした後、毛利派の武将が籠る水生城を攻めるべく狭間坂を経て八代川合流点付近（多分）にて円山川を渡ります。この時、秀長の軍勢は円山川をどのようにして渡ったのでしょうか。ここでも太郎左衛門が多数の舟を並べてスタンバイしていたのでしょうか。こちらの方は残念ながら伝承が残っていません。

クマノミズキ（熊野水木）

ミズキ科ミズキ属の落葉高木。わが国では、本州、四国、九州の山地に自生する。樹高は8～12m、花期は6～7月で新枝の先に、径8～14cmの散房花序をつける。花は多数の白色4弁花。10月頃に径5mmほどの球形の紫黒色核果をつける。和名の「クマノ」は、三重県熊野地方で発見されたことに由来し、「ミズキ」は春先に枝を切ると樹液が滴ることによる。伊佐橋右岸部にて撮影。



写真-11 クマノミズキ（平成27年6月撮影）

【参考資料】

- 1 『兵庫県史・第三巻』 兵庫県 昭和53年3月
- 2 『養父町史・第一巻（通史上巻）』 養父町 平成2年3月
- 3 『八鹿町史・下巻』 八鹿町役場 昭和52年10月
- 4 『城跡と史料で語る 但馬の中世史』 宿南 保 平成14年5月
- 5 『郷土の城ものがたり～但馬編』（財）兵庫県学校厚生会 昭和47年11月
- 6 『豊臣秀長、公事、本途物成、夫米、クマノミズキ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
- 7 『伊佐橋』 橋梁台帳

※発行：令和4（2022）年10月 『ひょうご水百景』No.159

改訂：令和8（2026）年 7月 『ひょうご水百景』No.159